人/生活/読書

二見書房刊

椎名麟三著

人/生活/読書

昭和42年1月12日　初版発行

著者との協定により
《検印廃止》

©Printed in Japan.

人／生活／読書

定価450円

著者　椎名麟三

印刷　株式会社堀内印刷所

製本　株式会社徳住製本所

振替東京2639番
電話東京(263)0034番
東京都千代田区神田三崎町2—16

発行　株式会社二見書房

目

次

第一章　人生について

愛と自由と幸福と　8
行動というもの　40
性は怒りに似ている　52

第二章　旅にて

幼女の踊り　58
監房と女と明石　61
九十九里浜　66
伝　説　87
訪中断片　93

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

田中英光の問題 98
道南旅行雑記 104
三人弥次喜多 111
真夏の夜の夢 117
ある青年孤児園長 123

第三章　私の生活体験

ある女優の話 138
日射病のにわとり 145
木賃宿 152
ある夕方に 160
恥じと誇り 164

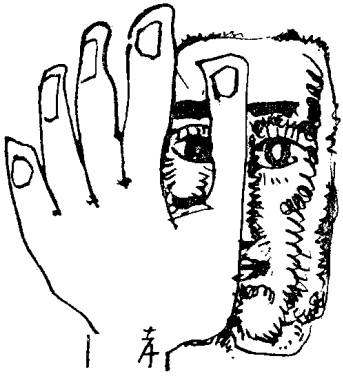
個人と群衆　169
対話の精神　174
「交り」ということ　181
わが夢を語る　188
魔の領域　193
わけのわからない存在　200
街のクリスマス　206
忘れられた人々　211
深夜の饒舌　218

第四章　読書ノート

紳士ワトソン　226

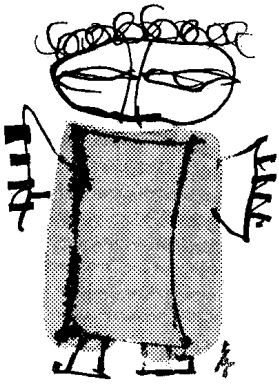
小説を読むということ　230
誰に訴えるのか　234
林芙美子　240
孤独の花　243
歎異抄の人格　249

カット　赤星　孝



第一章　人生について

*



愛と自由と幸福と

1　迷子の泣き声

みなさん方は、お祭りや縁日や、あるいはデパートなんかで、迷子になって泣いている幼い子供の姿をごらんになったことがあると思う。おまわりさんやあるいはデパートの女店員さんが、いくらなぐさめても、その子供は、泣きしきるばかり。

心のやさしいあなたは、誰がその子を連れて来たのかわからないにしろ、たとえばおかあさんがつれて来たのなら、早くそのおかあさんが見つかればいいな、とお感じになるだろう。しかし私自身は、そのような光景にぶつかったとき、その幼い子供の泣き声のなかに、「人間」というものを強く感ぜずにはいられないのである。

アフリカのズールー族という土人は、抽象的な言葉を知らない。自由とか平和だとか正義だとかいうような言葉はもちろんのこと、遠いとか近いというような日常的な抽象語についてもそうらしいのである。

ところが、この「遠い」という言葉をどういうふうにいっているかというと、「おっかあ、おれは迷

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

子になった、といって泣き出すところ」といっているそうなのである。考えて見るまでもなく、なかなか具体的で真実味にあふれている。しかも遠いという言葉の本質を見事に表現していると思われるのである。

幼い子が、迷子になって泣き出すのは、「おっかあ」から遠く引きはなされてしまっている自分を感じるからなのであろう。しかもこの遠さは、「おっかあ」を見ることができないということによって、かぎりないものとなる。だからますます恐しくなり淋しくなって泣き出す。

そのときの「おっかあ」とは、一体迷子になっている子供にとって何なのか。その迷子にとっては、「おっかあ」はそこでは安心していられる家でもあり世界でもあるわけなのだ。少くとも「おっかあ」に手を引張られていなくても、いつでもそこへ行きさえすれば安心のできる場所であるといってもいいだろう。

未知の理解できないものに出会った幼い子は、急いで母親のスカートのかげにかくれるか、母親のいる家のなかに逃げ込む。母親のスカートへつかまっていさえすれば、家のなかへ逃げ込みさえすれば、安心できるからなのだ。

だが、私たち人間は、ある時期に、この安心できる世界から引きはなされて、孤独な旅をはじめなければならないのである。あの迷子の泣き声が、私の胸を打つのは、かわいそうだという以上に、そのような私たち人間の運命の姿が強く感じられるからなのだ。むろん多くの方々は、「いえ、わたしは、いつも楽しくて楽しくて、死にたいほど楽しいわ」とおっしゃるかも知れない。

だが、イギリスのある小説でこんな話を読んだことがある。ある仲間たちでつくっているクラブに一人の人気者がいた。陽気な男で、彼がやって来ると、クラブ中が明るく賑やかになる。その彼には、み

じんの淋しさや孤独なんかの影なんか感じられない。それはクラブの人々にとって不思議なほどだったのである。

だが、人間である以上、死ななければならない。その男にも、偶然な事故という形で死がやって来た。

クラブの人々は、その死で淋しくなると同時に、その彼の不思議なほどの陽気さの秘密は何だろうということになった。そこでその男を解剖して見ることになるのだが、その解剖に立会った人々はつよいショックを受けなければならなかった。というのは、おどろいたことには、その男の頭のなかには、脳味噌なんかまるでなかったからである。

むろんこれは寓話に近い小説である。しかし作者がこの話で表わそうとしているものは、申し上げるまでもなく、人間が脳味噌をもっているかぎり、人間は淋しさだとか孤独だとかいうものを感ぜずにはいられないということなのだ。ちょっとむつかしくいうと、人間に意識というものがある限り、その意識は運命として孤独という性質から逃れることはできないということでもあるのだ。

いいかえると、「わたしは、どんなときでも楽しくて楽しくて仕方がない」と思っていらっしゃる方でも、その陽気さの底には人間の孤独が頑として控えているということでもある。

しかも私たちは、迷子にならなくとも小さいときにすでにこの孤独を経験しているのであって、人間の最初に知る自分というものは、孤独という形においてだといえるのだ。

2　精神の乳ばなれ

天才は、もう三つぐらいで、孤独な自己に目覚めるといわれている。私の場合は、どうやら鈍才らしいので、その目覚めはずっとおそく、七つぐらいのときであった。

私は、姫路の郊外にある農村で生れた。つまり母の実家で生れたわけなのである。もうそのころから父と母との間はうまく行っていなかったらしいのだが、母と実家との間もうまく行っていなかったらしい。というのは、農家である実家の納屋で私を生んでいるからだ。

納屋というのは、収穫物なんかを入れておく物置だが、そんな物置でなく、うまやでも生れていたら、キリストのようにえらくなっていたのかも知れないが、どうも物置では仕方がない。

そして三日目に、母は私を抱いて鉄道線路をさまよっているところを警察に保護されて、大阪の父のところへ送りかえされている。だから六つぐらいまで大阪で育ったわけなのだが、ついに父と母との別居ということが起り、私が小学の一年になったころ、母の実家のある村に小さな家を建て、大阪の父と別れてそこで暮すということになったのである。

ところで、小学の二年の夏休みの終りのころであった。私は、東坂という村に住んでいたのであるが、学校は西坂にあり、そこへ通っていた。その東坂と西坂の間に、田へ水をやる灌漑用の用水池がある。そのとき私は、母から用事をいいつかって、西坂の親戚の家へ行った。

しかしその村には私の友達もいることだし、遊んでいるうちに暗くなってしまい、あわてて自分の村へ急いだ。むろん近道の用水池の土堤を通ってだ。

その土堤は近道であるという以上に、私たち少年にとって恰好な遊び場所であり、その土堤の隅々まで知っているほどの親しい場所であったのだ。その池で泳いだり、菱の実をとったり、ぐみの木もあり、忍術ごっこやかくれん坊をすることもできた。しかも学校への往き帰りには、その土堤を通って行く。だから夜でも平気でいままでも通っていたのであった。

当然そのときも、帰りのおくれた私は、その土堤の上を急いでいたのである。

しかしそのとき私は、思っても見なかったことに出会ったのだ。というのは、ひょいと池のなかを見ると、直径六十センチばかりの金色の一つ目が、池のなかから私の方をじっと見ているだけでなく、小牛の鳴くような声を立てているのだ。恐怖が私の身体をつらぬいた。

私は、この得体の知れないものから一散に逃げ出し、死にものぐるいといった情ない状態で、鎮守の森の近くにある私の家へ辿りついたのである。そして母親の顔を見たとき、安心すると同時に泣き出していたのであった。

母は、父と別居して以来、いまでいう欲求不満からであろうが、幾分ヒステリックな女になっていて、母の機嫌を損じると、竹ぼうきをもって村中どこまでも私を追いかけて来るといった女だった。

だから家へとび込んで母の顔を見るなり泣き出した私を見て、母は、どうしたのかとしつこくたずねるのである。使いに行った親戚の者が何かしたのかとか、誰か自分の家のことについていっている悪口を聞いたのかとか、或いは誰かと喧嘩したのかとたずねるのだ。しかし私には、母のどの質問にも答えることができなかった。自分の出会った事柄は、友達はむろんのこと母に話してもわかってもらえないだけでなく、軽蔑されて一笑に付せられてしまうだろうということが子供心にもわかっていたからである。

私は、もう敷いてあった蒲団のなかへ夕御飯も食べないですごすごもぐり込んだ。母は、そのような私の様子に、さらにしつこくなり、私の枕元までやって来て、同じような邪推をふくんだ質問を次から次へと繰り返すのだ。私は、遂にすっかり蒲団のなかへもぐり込んでしまった。すると母は、遂にあきらめたのか、暗い吐息をしながら、

「けったいな子やな！」

といまいましそうにいいすてて台所の方へ去って行ったのだ。だが私は、その母の後姿を蒲団の隙間から見てショックを受けていたのである。同時につよい孤独感におそわれていた。というのは、蒲団の隙間から見えた母の後姿が、人間でない異様な生物という感じがしたからであった。

その孤独感は、まるで世界が真暗になってしまったというような感じをともなった恐しいものであった。私は、いる場所を突然失ってしまったとでもいうように、蒲団のなかにもじっとしていることができないですごすご起き上り、結局台所で用事をしている母の傍へ行っていたのであった。

私は、その後、この小さな出来事で孤独づいたとでもいうのか、友達と遊んでいるときでも、ひょいとこのような恐しい孤独の感じに襲われることが多くなって行ったようだった。

人間が脳味噌をもっているかぎり、このような体験は、少くとも少年少女時代にもっているのである。ただそれは恐しい感情なので忘れようとし、実際忘れてしまっている人が多いのである。しかし少し反省されたら、このような経験は記憶の底から掘り起されるだろう。父や母に何か願いごとをして許してもらえなかったときに、あるいは友達との間に感情的な行きちがいがあって、学校からの帰りにはいつも一緒であるはずなのに、ひとりでとぼとぼ帰って来るときに、このような感情を味(あじわ)っていらっしゃった筈(はず)なのだ。

しかしそのことは別に恥(はずか)しいことではないのである。むしろ誇ってもいいことであって、それはあなたが「自己」というものをもっていらっしゃるという証明でもあるからだ。いいかえれば、それは精神的な乳ばなれといっていいのであり、人間に脳味噌があるかぎり普遍的なものなのである。さらにいいかえれば、孤独は、人間に訪れる最初の根本的な自由だということさえできるだろう。それは残念なことであるが、自分の安心していた家や世界から自分を引きはなすという仕方で、その自由が表現されて

いるからである。だから新時代の女性の先駆者となった「人形の家」のノラは、自分は夫の人形でなく人間であることを宣言するために、夫の家を出て行ったのである。そうするほかに彼女が自分の自由をとり戻す方法がなかったのだ。

3　家を出るということ

私も家出している。しかしノラのような自由のための家出というような自覚的なものでなくて、むしろ無自覚的なものといっていいだろう。しかし私の家出は、そこに人間が、安心していられる場所から引きはなされる場合の根本的な典型の一つを演じていたことがわかるのである。

私の両親の別居のことは前にも述べたが、私のほかに二人の弟妹が母と一緒だったので、それでも父は、一ヵ月に一度ぐらい、大阪から姫路の近くの農村にいる私たちのところへ帰って来ていた。父は、鉱山会社につとめていたが、相場でかなりの金をにぎっていたらしい。

だが、二、三年もたつと、金は送ってくるが、私たちのもとへはやって来なくなり、五、六年もたつと金さえ送って来なくなった。その背後には、大正の大きな経済的な変動があって、父の勤めていた鉱山会社はつぶれ、父ももっていた金を失ってしまっていたというような事情もあったらしい。

しかし私にはそのようなことはわからなかった。ただ、生活が窮迫し、私が中学の三年になったとき、授業料も払えないばかりか、食べる米にも事かく有様になってしまった。しかも母は、始終胃腸をこわして寝ている。その母の暗い顔は忘れることのできないものである。

で、三年生になったばかりの私は、母がどこから工面したのか知らないが、片道の汽車賃をもって、母のかわりに大阪の父のところへ金をもらう交渉にでかけたのであった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.co